Weekly Survey

米ソの対話が進むなか、2年前に駐ソ米大使館で起きたスパイ事件の真相を暴く著作が出版され、話題に。ソ連軍撤退は完了したが、アフガニスタンの内情は緊張が高まる一方。ハンガリーでは1956年の「事件」の再評価で、社会主義労働者党が揺れる。

中嶋嶺雄

2年前のスパイ事件を追う話題の書

今週のカバーストーリーは、*Moscow Station: How the KGB Penetrated the American Embassy* というタイトルの書物の解説と抜粋である (pp. 26-37)。これは、モスクワの米国大使館を舞台に1987年に起きたアメリカ海兵隊員スパイ事件に関するドキュメントである。

このような記事を読んで、しばしば「情報に弱い」、「スパイ天国」などと評される日本は大丈夫なのだろうか、と思う向きもあるかもしれない。確かに国際政治における諜報活動は無視できないものであるし、だからこそこの著作も *TIME* のカバーストーリーとして扱われるのである。しかし、諜報はあくまでも情報の一部分を成すものであり、それを過大評価する危険性が昨今のジャーナリズムにあることも否定できない。そうした点を念頭に置いて読むと、この著作も読者に迫ってくるであろう。From the Publisher (p. 5) のコラムを読むと、*TIME* 編集者の R. クリスや抜粋の作成を担当した E. マグヌーソンがいかに著者の R. ケスラーを高く評価しているかがわかる。いずれにせよアメリカ人にとってはいささかショッキングな内容であり、米国国内でもおおいに話題となるであろう。

ソ連軍のアフガニスタン撤退完了

TIME は、国際社会の多様化に関する意味深い洞察を示すとともに、カレントなトピックスに関する鋭い分析のメスを加えるところに特徴がある。

今週号の Asia/Pacific 欄のトップは、ソ連軍のアフガニスタン撤退を論じている。ソ連軍は、ゴルバチョフ書記長のリーダーシップによって、この2月15日にアフガニスタンからの完全撤兵を実現した。1979年12月のアフガン侵攻以来、実に9年2カ月もの間11万余のソ連軍がアフガニスタンに駐留し、米国のベトナム戦争介入と好対照を成す泥沼に陥っていたのだが、ここにソ連のアフガン介入の歴史は終息した。それは *TIME* の "Without a Look Back" (pp. 8-9) というタイトルが示すように、ソ連にとってこの過去は振り向きたくない挫折であり、敗北であり、それ以上に介入は誤った決断であったといえよう。しかし、ソ連軍の撤退はアフガン情勢の安定化をただちにもたらすわけではない。カブールのナジブラ政権が、ただちに反政府ゲリラ勢力の反乱に当面せざるを得ないというジレンマのなかに立たされての、今回のソ連軍撤退なのである。ここ当面、アフガニスタン情勢からは目を離せそうにない。

故郷へ帰るソ連兵

ハンガリー事件見直し

World 欄は、東欧情勢、つまりハンガリーとポーランドの近況を論じている。ここでは

過去見直しを迫るポジュガイ政治局員(左)とグロース書記長

ハンガリーの動きに注目しておきたい。ハンガリーでは現在、1956年のハンガリー事件の歴史的評価をめぐって重大な論争が続いている。指導政党のハンガリー社会主義労働者党(共産党)は、ハンガリー事件を「民衆蜂起」が「反革命」に転化したものと規定して妥協を図ろうとしているが、それは、改革派の旗手として国民に人気のあるポジュガイ政治局員（国務相）がハンガリー事件をソ連に支援された権力への「民衆の蜂起」(popular insurrection)として高く評価しようとしたのに対して、メーメト首相やグロース党書記長らの異論、とくに保守派のベレツ政治局員兼書記の批判があることを背景にしている。今回の労働者党中央委員会総会の決定だけで、この問題がはたして結着するのかどうか。今後の推移を見守らねばなるまい。

ブッシュは約束をどう果たすか

さて、いよいよブッシュ新政権がスタートしたが、早くも各方面からの批判、批評が出てきている。"The Bush Era Begins" と表紙に掲げた *TIME* 1月30日号に対する読者からの意見を Letters 欄(p. 2)で読んでみると面白い。「ブッシュはカメレオンのようだ」とか、彼の就任演説について、「思いやりのある優しい言葉だが、言葉は言葉」("Kind words, gentle words, but still only words.") といった批判も見受けられる。このコラムを見たかぎりでは、わが国でも評判のよいブッシュ新大統領について、アメリカ人の間には厳しい批判があるようだ。

ところで、歴代の米国大統領の演説には、「名演説」と呼ばれるものも多いが、やはり第二次大戦後のものでとくに有名なのはジョン・F. ケネディの大統領就任演説であろう。「アメリカ人のみなさん、みなさんの国がみなさんのために何をしてくれるかを問うのではなく、みなさんこそみなさんの国のために何ができるかを問うてほしい」(. . . my fellow Americans: ask not what your country can do for you—ask what you can do for your country.) と1961年1月20日、彼は国民に向かって訴えた。ジミー・カーターは1976年に、米国がみずからの力の限界を知ることが必要であることを就任演説で述べた。

「思いやりのある優しい言葉」("Kind words. Gentle words.") で就任演説を終えたブッシュ大統領が今後どのような具体的政策を打ち出していくのか、批判的な眼を持って見守っていきたいところだ。さしあたり双子の赤字をどうするかだが、財政問題に関しては、"Reaganomics with a Human Face" (pp. 22-24) が参考になる。

まず言葉ありき。さて次にブッシュは……

聖地に集まるヒンズー教徒

今週号の圧巻は、"Paradise Promised" (pp. 52-55) として掲載されているヒンズー教の祭り（Kumbha Mela）の写真である。前述のカバーストーリーとも関連のある高度情報化社会、ハイテク社会をまったく関知しないかのように、1500万人もの人々が聖地に集まっていく様相は、一瞬この世のものかと目を疑いたくなる。

「自由」、「平等」、「基本的人権」、「愛」などという価値のシンボルは現代世界ではあたかも絶対であるかのように考えられがちだが、古代より続けられているというこうしたヒンズー教の祭りを目のあたりに見るにつけ、現代とは何なのかをもう一度自分自身にも問いかけてみたくなる。

●

最後に、先の Letters 欄には、"Love's Language Lost" というタイトルで日本人の英語力について、2、3の意見が寄せられている。*TIME* の日本人読者としては、こうしたコメントにも興味をそそられる方が多いであろう。

(なかじま　みねお／東京外国語大学教授)

February 20, 1989 タイムマラソン 平成元年２月23日発行・毎木曜日発行・第５巻・第25号・通巻第234号・昭和60年２月13日第３種郵便物認可

TIME

Weekly

SCOPE

United States

Moscow Station

World

Beyond the Grave

Space

A Flap over Reactors in Orbit

TS Feature
TIME Commentary